



いずみさの昔と今 第313回

「昭和初期の泉佐野の発展」

1月15日(土)から始まる歴史館いずみさの冬季企画展「むかしなつかし 昭和のくらし」に関連して、今号からは昭和の泉佐野と人々のくらしを振り返ります。第1回目の今回は、昭和初期における泉佐野地域の街の発展を見ていきます。

昭和初期の泉佐野は、交通網の発達により商工業の形態や街の様相が変化しはじめた時代でした。まず初めに整備されたのは鉄道です。明治30年代に開通した南海鉄道(現南海本線)に続き、昭和5(1930)年に山側に阪和電気鉄道(現JR阪和線)が開通しました。開通と同時に貨物取扱駅であった日根野駅・長滝駅の2駅が、また昭和14(1939)年には泉ヶ丘駅(現在の東佐野駅)が設置されます。阪和線の開通は農作物の出荷の便を向上させ、駅では貨物列車にタマネギを積み込む光景が見られました。こうして開通した南海線・阪和線は、ともに戦時中には軍事物資を輸送する幹線として利用されています。

鉄道に続いて道路が整備され、昭和17(1942)年に旧国道26号線が開通しました。当線は幅員16メートルの近代的道路であり直線コースであったこと

とから、幅員が狭く屈曲した旧国道(孝子越街道)を補う道路として重宝され大型車両が行き交いました。当線の開通により佐野町の商店街の一部は移転を余儀なくされましたが、タオルなどの繊維製品のトラック輸送が行われるなど、商工業における利便性が向上しました。

交通網の発達とそれに伴う産業の発展は、本市の都市的発展を促し、泉佐野に暮らす人々の生活にも大きな変化をもたらしました。とりわけ南海線の開通はタオル産業をはじめとする繊維業の発展を促し、南海沿線には工場が多数設立され工場労働者の人口が増加しました。工場労働者の中には遠方からの移住者も多く、泉佐野駅周辺には寮が散在していたといえます。工場労働者の人口増加は必然的に佐野町の商業にも影響を及ぼし、佐野町場は劇場や映画館、料亭や喫茶店など数多くの店が立ち並ぶ繁華街としてにぎわいました。当時の商店街は「夜になると人におつからないで歩くことが難しくくらいに混み合った」といい、その活況がうかがわれます。

5(1930)年に駅前通り商店街に設置されたすずらん灯は佐野町場が一つの近代都市として成長したことを象徴するものでした。すずらん灯とは電球の配置がすずらんに似ていることから命名された街灯であり、その斬新な形状から都市部を中心に全国的に流行しました。すずらん灯の灯りは、まさに当時の泉佐野の繁栄を象徴する灯りであったといえるでしょう。



▶昭和17(1942)年の駅前通り商店街(当館蔵)
※右側の電柱付近に映るのがすずらん灯

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、毎月最終木曜日(いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館)
開館時間
午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る③① ～旅引付編(14)「七宝瀧寺」(後編)～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち—中世日根荘の風景—」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介いたします。

問合せ先 文化財保護課



◀政基公旅引付
※旅引付の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用(原本は宮内庁書陵部所蔵)



七宝瀧寺 清瀧堂と行者の瀧

日根荘領主の九条政基が大木で滞在中の文亀2(1502)年11月に、別当真福院真海から借りて書写した「七宝瀧寺縁起」が現在宮内庁に残されており、七宝瀧寺の由緒を知ることができます。これによれば、山中奥の瀧の岩上に不動明王が出現したのを見て歓喜感涙した役行者が山頭の荒地を開いて一宇の草堂を建立、出現の像を彫刻に仕上げ本尊とし、また、山中にある七つの瀧が「七宝充満の智水(煩惱を洗い流すの意)」であることから、寺号を「七宝瀧寺」としたことがわかります。

政基の書いた日記『政基公旅引付』にも「七宝瀧寺」や子院(坊院)である「阿弥陀坊」「西坊」「武蔵坊」の名前が書かれており、文亀2年8月に和泉下守護の被官であった佐藤久信らの軍勢が上之郷、日根野西方、土丸を攻撃した際に西坊に避難したことや、犬鳴山の寺僧が火走神社などで雨乞いをしたことが書き残されています。七宝瀧寺は日根荘において重要な存在であったと同時に、現在も見られる瀧に打たれる修験者など、当時の日根荘の姿を今に伝える貴重な文化財となっています。